

2025年度 地域連携活動助成金 活動成果報告書

1 活動概要

活動団体名	農学部土地資源学研究室
活動テーマ	福島県飯舘村および浜通り地区の農業復興支援
活動期間	2025年 7月 1日 ～ 2026年 2月 28日
主な活動場所	福島県飯舘村および浜通り地区
連携地域	福島県飯舘村
連携団体等	認定NPO 法人ふくしま再生の会 http://www.fukushima-saisei.jp
活動者数	10名 ※ 活動に参加した本大学の教職員及び学生の人数を入力してください。

2 活動概要 ※活動内容や活動成果は地域連携センターHP等で公表します。

活動目的（地域が抱える課題との関係や活動により期待される効果等、本活動が地域の課題解決や活性化につながる事が分かるように記入してください。）

スタート型：新しい地域連携活動を着想した背景、また必要性について記載してください。

ステップアップ型：「過年度の活動内容」を記載の上、今回の申請の「発展性」あるいは「応用内容」などを記載してください。※過年度の活動が無ければ記入不要です。

島県飯舘村および浜通り地区は、東日本大震災および原発事故の影響により長期にわたる農業の中断と地域社会の分断を経験した地域である。復興が進むなかで、営農再開に向けた課題として、土壌の劣化、農地管理技術の空白、人材の減少が深刻である。本活動は、農学部土地資源学研究室の知見と学生の主体的関与により、科学的調査・現地支援・教育的交流を通じて農業復興と地域活性化に貢献することを目的とする。活動を通じて、地域の土壌環境の診断と改善提案、担い手との意見交換、地域行事や学習イベントへの参加を通じた信頼構築を図り、持続可能な農業再建の一助となる事が期待される。

本研究室は2011年度から福島県飯舘村において実験・調査を通じた農業復興支援活動を行っており、本申請はその成果を発展的に継続するステップアップ型活動として位置づけられる。2024年度は、2ヶ月に一回程度の土壌残留放射性セシウム量測定、飯舘村ナイター駅伝参加、マツタケ山調査を実施した。成果は、農業農村工学会、土壌物理学会、復興農学会において、ポスター発表や口頭発表を行った。将来的には長期的な連携拠点形成を目指す。

活動計画（活動目的を達成するための具体的な計画や方法、申請団体と連携地域・団体等がそれぞれ担う役割、過年度の活動実績や次年度以降の継続性等について記入してください。）

本活動は、以下の3つの柱を中心に展開する。

1. 農地の現地調査と土壌診断：住宅地裏の斜面において土壌採取をし、土壌中の放射性セシウム分析（放射性物質残存状況）を実施。結果を住民へフィードバックし、安全担保するデータを提供する。
2. 住民・農業者との協働イベント：認定NPO法人ふくしま再生の会との連携により、学生主体の活動（例：マツタケ山調査、飯舘村主催駅伝大会参加など）を実施。
3. 学生による地域交流・研究活動：活動を通じた成果をポスターやスライドにまとめ、2025カーカム会議、土壌物理学会、復興農学会大会などで発表する。

活動スケジュール（実施した広報活動についてもご記入ください。）

7月30日：飯舘村聞き取り調査（1人参加）

8月18日～23日：福島県檜葉町で開催の2025カーカム会議で発表と会議運営参加（10人参加）

10月20日～22日：飯舘村聞き取り調査（1人参加）

10月25日：土壌物理学会（三重大学）で発表（10人参加）

連携先からの一言/参加学生からの一言/参加者からの一言（連携先又は参加学生からの一言の場合、所属と氏名をご記入ください。）

所属：農学部 氏名：佐藤直人

カーカム会議では福島第一原子力発電所の事故に伴う土壌汚染の実態について、現場の視察および解決方法に関する議論が展開された。福島県における処理土の問題は、現在日本が抱える喫緊の課題の一つであり、この課題解決のため今回醸成された国際的なネットワークを活用していけることが望ましいと感じた。

所属：大学院農学研究科 氏名：鈴木隆介

福島県飯舘村の環境現場を視察し、環境問題が、過去の問題ではなく現在も続く課題であることを実感したとともに、復興の重要性や研究の社会的意義について考えさせられました。

所属：大学院農学研究科 氏名：磯貝好輝

中間貯蔵施設に大量の汚染土壌が残されており、それをさらに県外に運び出さなければならぬ現状を、世界の土壌物理学者と一緒に見て学べたことがとても貴重な経験になりました。

所属：大学院農学研究科 氏名：工藤航平

カーカム会議では、さまざまな国の方々と関わることができただけでなく、被災当時のままの施設を見学することができ、大変貴重な体験をさせていただきました

所属：農学部農学科 氏名：山中志音

震災で実際に被害を受け、当時の状態のまま保存されている施設など、通常では見学できない場所を訪れることができ、福島復興について理解を深める非常に有意義なフィールドツアーであったと感じました。

所属：農学部農学科 氏名：黄檗

カーカム会議の運営に関わることで、農業復興支援の現状と課題を実際に学ぶ貴重な機会となりました。